

方丈記臆解^{おくげ}

市川 浩

抑も一期の月かげ傾きて、餘算の山の端に近し。たちまちに三途のやみに向はむとす。何の業をかかこたむとする。佛の教へ給ふ趣は、事にふれて執心なかれとなり。今草庵を愛するも、閑寂に著するも、障りなるべし。いかゞ要なき樂しみをのべて、あたらし時を過ぐさむ。しづかなる曉、このことわりを思ひ續けて、みづから心に問ひて曰く、世をのがれて山林にまじはるは、心をさめて道を行はむとなり。しかるを、汝姿は聖人にて、心は濁りに染めり。栖はすなはち、淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつところは、周利槃特が行ひにだに及ばず。若しこれ貧賤の報いのみづから惱ますか、はた又妄心のいたりて狂せるか。その時、心更に答ふることなし。只かたはらに舌根をやとひて、不請の阿彌陀佛、兩三遍申してやみぬ。

于時建曆の二年、彌生の晦日ごろ、桑門の蓮胤、外山の庵にして、これをしるす。

右は鴨長明（法名蓮胤）著方丈記の最終節なり。本書は文語三大隨筆の一つとせられ、特に冒頭の「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」は克く人口に膾炙す。然るに最も重要な最終節には、文意に關する論議を聞く尠し。僭越を顧みず敢て臆解を試みる次第なり。

既に人生の終りを閒近にして來たるべき火途、刀途、血途の三途の責めも甘んじて受くる覺悟なり。これは事毎に執著せざれとの佛の教へに従はむとす。然るに現世に於て、草庵にての閑寂の生活を愛するは、執著にあらずや。役にも立たぬ樂しみを語りて折角の時を過ぐして良き苦なからむ。この疑問に悩む、これ起承轉結の起なり。

靜かなる早朝、この疑問を己れの心に問ふらく、自分の隱遁生活は佛道修行が目的なるに、外見は高僧、聖人に似たれども、未だ大悟せざるは、貧賤に陥りて心賤しくなりたる故か、それとも心が狂ひて道を誤てるかと。然れど我が心は答ふることなし。これ承なり。

阿彌陀如來は不請即ち衆生に請はれずとも救ひ給ふを頼りに、念佛二三度にして、忽ち眼前開けて大悟す。この讀解の要點は「やみぬ」なり。完了の助動詞「ぬ」の接ぎやうより、「やみ」はマ行四段自動詞（他動詞は下二段活用）「止む」の連用形と知るべければ、「やみぬ」は「兩三遍申して」念佛を中止したるには非ず、前述我が心に問ひし疑問氷解と見るべし。これ轉なり。

大悟を實感せる、嬉しきこと限りなく、その奇跡の時刻を記さむとするは、「于時」に明らかにて、かの道元禪師も大宋國太白名山天童如淨古佛に面授せられる日附、正法眼藏第五十一面授の卷に二ヶ所見ゆるが如し。これ結なり。

故に結論を述べれば、本節は長明大悟の始末を語りたる歡喜の敘述なり。されば方丈記は單なる隨筆にあらずして、佛道大悟の實記なり。更にこの建曆二年（一一二二）は法然上人遷化の年に當り、その説ける念佛往生を實證し、かくて源信、源空、長明の三聖大乘淨土宗の基礎を築き給へり。

（附記）昭和五十五年當時、東京町田市能ヶ谷町にありし萬國佛教徒聯盟兼正統國語運動の機關誌第八卷に「方丈記に於ける鴨長明の本意」と題し、右本文「靜かなる曉」以下、これを英譯せる A.L.Sadler

（昭和三年（一九二八））及び Donald Keene（昭和三十年（一九五五）頃）の英譯を始め、南方熊楠他、日本人國文學者の説を紹介、但し満足し得ずとて、同聯盟總裁の橋本忠次氏の自論を展開せるあり。拙

論と異なるあるも、敢て論ぜず。

(令和元年七月十八日受附) 附

・